書　評

大阪市立大学
難波宮址研究会

難波宮址の研究

かつていわゆる国史地理家喜田貞吉等によつて論戦をくりひろげられた帝都を中心としたわが古代都市の研究は、戦前の藤原京址の論争を最後として下火になつた感があつた。事実戦後古代史の実証的研究などといつた旗がうちたてられながら、数多くの日本古代史家たちはこのような問題になお深く立ち入ろうとする気配が少いように思われる。さればとて考古学者もまた日本の場合では古墳や寺院址以外の問題には今も昔も無関心であるように思う。それは平城宮址の研究に関するお株がふるく建築史家の関野貞や考古学者の眼からみれば歴史家に属すると分類別された喜田貞吉に奪われたことにもよるのだろう。それとその間地理学の側からは古代の尺度を論じた藤田元春の研究が見られたにすぎない。

学は個人のものであつてはならないのに、後継者をもたぬ喜田博士の没後、この方面の研究は一たい誰が発展させて行くべきなのであろうか。ここにいう難波京の研究もまた、その研究史を溯れば、応神天皇の大隅宮、仁徳天皇の高津宮、孝徳天皇の長柄豊碕宮、天武天皇の難波羅城、聖武天皇の難波宮等をめぐつて、地味な研究者たちによつて論争が展開されたところであつた。まず当の喜田博士は高津宮以外はいずれも淀川三角州地帯にあつたとするのに対して、大阪の郷土史的歴史家天坊幸彦はのちの難波宮は高津宮地を継承したものとして、限定された文献の地名考証を行い、豊碕宮のみに関しては喜田説が継承された。一方昭和のはじめ古道の研究に詳しかつた竹山真次は高津宮址即聖武難波宮説を力説し、仁徳代の南門大道は難波宮の朱雀大路に相当するのみならず、同時にまた古代の熊野街道にも該当する。氏によれば四天王寺以北の地割が以南のそれに対して約一〇度傾斜することを指摘し、これは阿倍野筋に結ばれる古道であるとする。一方藤田博士もまた現在の大阪市街の地割を測定し、ことに四天王寺付近の四〇間地割が四天王寺設立当時ないしはそれ以前のものだとする。豊碕宮を上町台地に求めんとする藤田説は、かくて喜田説に反対することになる。

これらのままで永い間停止の状態になつていた難波宮の研究が戦後、ことに昭和二七年以後大阪市立大学の大阪城址並びに難波宮址研究会の手によつて、今度は書紀や続紀その他の文献考証のみにとどまらず発掘に成功、新たな資料を提出することによつて難波の諸宮に対して、いま何等かの断定が下されようとしている。しかも最初大阪城址の研究として出発した本研究はその後、年を追うて継続される間にその名も難波宮址の研究と変名されて、その研究の予察報告が夫々昭和二九、三一年両度にわたつて出版されることになつたのである。かくて述ぶるところは、大阪城址というも結局は三一年度に出された難波宮址につながるものであることは一読すれば容易にうなずかれる。調査者また大阪市立大学理工学部や、文学部でも地理学教室の学者の名が連ねられ、名目上は共同研究の形になつているが、実質は難波宮址研究会の代表者である同大学の文学部講師（元教授）山根徳太郎氏を中心とし、氏を援助した歴史学教室のメンバーの作品ともいうべきであろう。

而して調査報告の概要また右の山根教授自身の論文集といつても過言ではないのである。すなわち難波宮址の場合四六倍版九二頁より成るその報告書の目次をみると、一、応神天皇大隅宮の研究（山根）、二、難波宮朝堂の発掘（山根）、三、法円坂町の考古学的調査（続）、（藤原光輝）、資料（直木孝次郎）となつている。

山根教授の研究の結論を一口でいえば大阪城の南側にあたる東区法円坂町の旧陸軍被服廠址や、さらに南方の聖学校高地における重圏文の丸瓦や布目瓦の出土、さらに擬灰岩の礎石状の盤石の出土をもつて聖武難波宮における朝堂址の遺構だと推定することである。氏の発掘の動機は古く、この被服廠址で奈良時代と思われる古瓦の出土をみたことに端を発するが、これを思い切つて発掘にのり出し、しかも推定大極殿址から今までにみない大鴟尾の破片四個や、多数の古瓦を包含する赤土層や、柱穴と思われるものを発見、古瓦出土の状況が二つのグループに別れ、朝堂院中の別の建物を葺いたもの、ないしは複廊の遺構ではないかと推定したこと等は、発掘から得た氏の独想的な見解として深く傾聴されねばならない。それのみでなく、もともと文献史家である氏は蓮如の石山本願寺がこの宮址に設立せられたこと、しかも本願寺史料のうち石山御坊草創についての記事のうち〃一宇御建立、其始ヨリ種々ノ奇瑞不思議等コレアリトナン、マツ御堂ノ礎（いしずえ）の石モカネテ土中ニアツメヲキタルガ如シ……〃の文章がその位置を語るとする。

本研究豫察報告はその名のごとく、これ以上具体的な難波宮の規模を記していない。ただ扉の第四図に推定難波宮址想定図があり、平城宮及び藤原宮の朝堂院のプランが、今次の発掘地点にあてはめられているのが注意されるにすぎない。

果して今次の発掘地点のみから、かかる朝堂院の各建物の一々までが復原されうるかどうかは疑問である。ただ評者は歴史地理学徒として、同教授が大極殿址付近に想定した箇処が洪積層で標識される上町台地のうちそのほぼ正中軸に該当し、且つ亦最高燥地であることを考え、同教授の推定がほぼ誤りではないように思う。これ以外の欲をいえば評者等の希望する難波宮ではないところの都市としての難波京全体の規模についても本書では指示推定してほしかつたことである。またもしこの正中軸を南に延長すれば、故竹山氏の高津宮南門大道との関係はどうなるのであろうか。そしてもしこの南門大道朱雀大路説を正しいものとすればこの線の北の延長線上に右の朝堂院址の北門がおかれなければならない。しかもこの北門を通り、朱雀大路に直角に引いた東西線について想定し、東京極をいま評者が仮りに定める等高線の五〇尺の傾斜変換線にとつた場合、左京の東西幅は約一〇町となり、藤原京とほぼ同程度の規模が考えられ、山根説を発展さすことになる。しかしこの場合の西京極の位置は五〇尺よりさらに低地にのび、上町台地からはみ出される。或は後の東横堀川が難波京の西辺ではないかとも推測されることなどである。しかしいまもし平城京の規模を之にあてんとすれば、東京極の位置は上町台地をはみ出て、五メートル以下の低湿地にのびて、折角の山根説も喜田説と大同小異になりかねないなどと、評者の頭にもいろいろのことが往来する。つぎの段階にあつては、大隅宮が上町台地にあつたとする文献的考証以外に、さらに豊楽宮や高津宮に関連した聖武難波京の位置が、藤原京や

平城京との関連において、一段と発展させていただきたいと思う。

本書を読んでいると白髪の老学者の、雨の日も風の日も、ひたすら野外の難波宮ととっくんで、吉田東伍や喜田貞吉以来の大問題を再び白紙にかえし、何とか今度こそは遺跡の実態を復原せんとして夢中である貴い姿に接する。さきに物故した天坊幸彦教授の「上代浪華の歴史地理的研究」といい、この「難波宮址の研究」といい、われわれ歴史家でない歴史地理学徒には、ことのほかその苦労のさまがありありと身に感じられ、同教授の研究がさらに集大成される日を心待ちするものである。（B五版九二頁図版二八 昭和三一年五月）

——藤岡謙二郎——

河手龍海著 日本塩業史

ここ数年来、わが国の製塩業は、所謂「入浜式塩田」から「流下式塩田」へと急速に切替られ、文字通り近代産業として面目を一新しつつある。しかし、そこには地主的土地所有関係、労働者問題などを纏つて、早急に解決を要する、幾多の複雑な課題を提起している。そしてこれらの問題は、明治以降、諸産業部門における急速な近代化をよそに、前期的経営が鞏固に持続され、その上、煎熬部門と採鹹部門の跛行性、しかもそれに専売制が絡まるといった、製塩業自体の特殊且つ複雑な発展過程の中に、その招来の主要因が存するものと思われる。かかる意味から、現在、現実の問題として製塩業発展の歴史的過程を仔細に検討する必要にせまられるであろう。

ところで、こうした現実の問題は暫くおくとして、一体、極めて特殊な分野に属する塩業史の研究が、歴史学の進展に如何なる寄与をなしうるものであろうか。そのことは塩業史を研究の対象とする者の第一に問題とすべき点であろう。がそれは簡単に論ぜらるべき問題でないので言及を避け、ここでは唯どういった問題が考えられるかについて二、三の点を掲げるに止めたい。一つは、わが国における賃労働発生史の問題に好個の研究対象になりうる事。すなわち製塩業は近郊農村の分解によって発生した無高層を年雇或は月雇、日雇の形で雇傭し、しかも幕末期には各地の塩田で塩業労働者の賃銀闘争が広汎に展開される事例は、わが国における近代的進化の問題との関連において充分検討されてよい問題であろう。また塩の流通過程についてみても、最近めざましい進展をみせた農村史の研究に比較して、商業史の研究は著しい立遅れを示しているが、塩の流通過程については極めて詳細な内容を示してくれる史料が豊富に残存し、今後これらの研究が商業史研究をより深めうるものと思われる。その他、近世塩業資本の産業資本への転化（今治綿業等）塩業を経済的基盤とする地方文化の開花（竹原）等々、製塩業は色々の興味ある課題をわれわれに示してくれる。こうした意味においても、最近、近世塩業史の基礎的仕事を纒められた河手龍海氏の労作「日本塩業史」刊行の意義は極めて大きいと言わねばならない。

さて本書の内容紹介に先立ち、わが国塩業史の研究史上、河手氏の労作を位置づける意味において、最近の塩業史研究の動向について若干述べておきたい。

塩業史の研究は、他の日本史の諸分野の研究に較べて、研究史も浅く非常に遅れているのはいなめない事実である。戦前の研究についてみると、中世関係のものとして、われわ